



巻頭言

## 「やせ我慢の美学」のすすめ

千葉泰久 Yasuhisa CHIBA

宇部興産株式会社 顧問・日本化学会 フェロー



振り返りみれば、この半世紀近く筆者は宇部興産(株)の一研究者・技術者として化学工業に取り組んできたことになる。この世に何を造ってこれたのか? との苛立ちも覚えつつ、化学と工業への想いを述べてみたい。

化学工業は戦後、海外からの導入技術に学び、日本独自に創生された差別化技術を加え、サイエンスとテクノロジーを上手く組み合わせて成長・発展を加速することにより、その役割・価値を認められてきたと言えよう。だがここに来て、3.11東日本大震災・原発事故に加え、米国発のシェールガス革命がエネルギー・資源の分野に大きなパラダイムシフトを喚起し、世の中が大きく変わろうとしている。米国がエネルギー資源大国に返り咲き、コモディティを含めた世界の製造拠点までが様変わりをはじめたのだ。さらに地球温暖化対策という大命題も機軸に割り込んできて、あらゆる事象が取り沙汰されるようになり、多くの国々が自身の主義主張を唱え激しい綱引きが始まっている。人間が快適な社会生活を営み続けたいと望む限り、エネルギーの安定確保がすべての社会活動・行動の基本となる。このエネルギー確保のグローバルな流れを読み取り、これを基本に据えて取り組んでいくことが今後の社会を切り開く力となるし、ここでこそ化学が重要な役割を担うことになる。従来では50~70年しか商業生産できないとされてきた天然ガスが、300年を超えて継続生産されるという大革命である。長い炭素鎖をブチ切ってきた化学から、軽質炭化水素をカップリングしていく化学へのシフトも視野に入れながら進まねばならないだろうが、難局に向かっているからこそ化学の研究開発にチャンスがきたとも言える。

研究開発は、僻みっぽく聴こえるようで少し気が引けるが「やせ我慢の美学である!」と筆者は考えている。途中で自信喪失になることも多いが、自分の向かう道・技術の素晴らしさ・将来性を夢見て、「志を高く」「やせ我慢」をしながら、時には「泣きながら」やっていく美しさがあると。井戸を掘るときは見向きも手助けもしなかった人達が、いざ水が湧いて出てくるとなるとワッと寄ってくる。ここまで来れば、その事業は右肩上がりでもう大丈夫。そこで「どうだ!」と居座り威張りたくなるのを、「ぐっとこらえてやせ我慢」をしながら、また次より新しい深い井戸を掘りに行く、この爽快な美学!

優れた企業は、トップの資質・能力・考え方をベースに、事業戦略と企業文化が上手く絡み合いスパイラルアップしていく。やはり「人」が基軸になり、地道に、高い志を持ち、人に慕われる「エリート」の育成が必要なのだ。予測のつき難い未来を徒に憂え悩むことなく、この変革期を先のことだと一笑に付さず、感性・センスを磨こう。科学の世界で「常識」とは、現在までの実証に基づいて「正しい」と結論付けられたものをいうが、今は誰も認めていない幾多の「非常識」の中にこそ、「正しいもの=常識」に昇華する芽があるはず。志ある研究者は、この「非常識」を「常識」化する感性・センスを磨く努力が肝要である。研究開発は楽しい!「やせ我慢」をしながら進もう。夢を見て、その夢の実現に想いを馳せよう。次世代に花開く、新しい「閃きのほとばしり」も期待して。

© 2015 The Chemical Society of Japan